

2022年2月 13 日 降誕節第8主日礼拝

メッセージ「苦難は絶望には終わらない」

牛田匡牧師

聖書 詩編 126 編 1-6 節、ローマの信徒への手紙 5 章 3-5 節

一昨日の金曜日、2月11日は「建国記念の日」で祝日でした。ですが、この祝日の意味や由来は、あまり知られていないように思います。もとは今から約150年ほど前の1873(明治6年)に定められた「紀元節」という祝日でした。そしてそれは何かといいますと、今の令和の天皇である徳仁^{なるひと}さんから、遡ること約2700年前、126代前の初代の天皇だと考えられている神武天皇が即位した日ということです。また明治時代には、その時代の天皇誕生日を「天長節」と呼んで祝日としていました。それが11月3日であり、現代の「文化の日」となっています。

天皇が明仁^{あきひと}さんから徳仁^{なるひと}さんへと代わり、元号が平成から令和に変わり、「天皇誕生日」の休日が、12月23日から2月23日に変わりました。また4月29日の祝日「みどりの日」も、もとは昭和天皇の誕生日でした。なぜ、天皇の誕生日が国家全体の祝日なのかというと、それは国家全体、国民全員でそれを記念してお祝いするためだ、というわけでしょう。そのために日本基督教団では、2月11日を「建国記念の日」という祝日ではなく、「信教の自由を守る日」としていて、今年も各地で新型コロナの感染予防のためにオンライン形式でしたが、天皇制について考える様々な集会が持たれました。

私たちの普段の日常生活の中では、天皇制についてあまり意識しない人も多いのではないかと思います。皇室に関するゴシップには喜んで飛びつく人が多いこともまた事実です。昨年から世間を賑わせていたのは、皇族だった眞子さんの結婚相手に関することでした。相手の方は一般市民であり、この結婚によって彼女は皇族から抜けるということが明らかだったにも拘わらず、「この相手は皇族の結婚相手にふさわしくない」などと勝手な誹謗中傷が、結婚前から、そして結婚後も未だに続いています。新型コロナウイルスの感染対策のことや、政治のことなど、もっと他にも注目すべき、考えるべきことがいくらでもあるにも拘わらず、他人のプライバシーを侵害することに喜んで聞き耳を立てるのは、人間の持つ卑しさの故なのではないでしょうか。また「天皇制」という制度が持つ、根源的な差別性なのではないかと思わされています。

ある血筋、家族に生まれたというだけで、何か特別な才能や能力が遺伝するわけではないということは、今日、明らかであるにも拘わらず、未だに日本だけではなく世界中で、王族や貴族が尊ばれ、その裏返しとしてゴシップの標的になっています。それは王族や貴族という制度自体が、本来あり得ないはずの「人の上に人を立てる制度」であるが故に、「自分たちの上に立つ人たちには、理想的であってほしい」、逆に言えば「こんな陳腐な人じゃ許せない」という人々の勝手な言い分であり、ゴシップはそれらのガス抜きをすることで、人々の間に上下関係や差別関係を固定化して、継続させていくことにつながっているのだと思います。仮に、血筋や家柄がよく、お金も十分にあり、食べるものにも着るものにも困らなかったとしても、だからと言って一家みんなが幸せで、悩みなんかが全くないかということ、もちろんそんなことはないはずです。むしろ、代々に積み重なったしがらみや立場、人々の期待などによって、がんじがらめにされて、個人の自由などというものはほとんど許されないのが現状かもしれません。ですから、天皇制に賛同し、親しみを抱くということは、そんな差別と人権侵害の仕組みを容認することにつながっている、ということ意識する必要があります。

本来、あってはならない「人の上に立つ人」を、勝手に理想化して祀り上げ、自分たちはそこからお恵みのおこぼれに与りたい、と願うのが世界共通の、人類共通の意識だとすれば、その裏側にはあるのは一体何でしょうか。自分が生まれる前から、すでに歴然とした上限関係、差別と支配の関係があり、それらを肯定的・主体的に受け止めるために、そう考えたのでしょうか。また決して無くなることのない数々の苦難や困難を前に、こんなはずではない、もっと素晴らしい生活があり、自分たちはそのおこぼれに与れるはずだ、と考えたのでしょうか。他にも理由があるかもしれません。しかし、そこに果たして解決の糸口、出口はあるのでしょうか。

日々の様々な困難に対して、「神様、どうか助けてください。この苦難を取り去ってください」と祈り願うことは、大昔から世界中で行われて来たことだろうと思います。コロナ禍の中、「疫病退散」のお守りがたくさん売れているのも、その表われてしょう。また聖書の中にも、確かにそのような人々の願いの声、祈りの言葉が、いくつも記されています。その一方で、聖書が私たちに伝えているのは、それらの苦難や困難が無くなって、経験しなくなるのではなく、むしろそれらを通して、その向こう側にたどり着くことができる、ということであるように思います。

今回の聖書は、ヘブライ語聖書の中から「詩編」126 編の言葉でした。とくに 5-6 節は有名なのではないかと思います。「涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる。種の袋を背負い、泣きながら出て行く人も／穂の束を背負い、喜びの歌と共に帰って来る」今、苦しみの只中にあり、涙にくれている人にとって、「今の涙はやがて喜びの歌に変えられるだろう」というのは、大きな慰めであり、希望です。今は涙にくれていても、それは種を蒔いているようなものだ、やがて収穫があるよ、ということなのでしょう。

この 126 編の歌は、古代イスラエル民族が、バビロニア帝国によって滅ぼされ、捕囚の民、捕らわれの民とされてから、何十年も経て後に、ようやく解放されて、「シオン」と呼ばれるエルサレムの町に帰ってきた、そして神殿を始めとする都を再建した、その喜びを歌った詩と考えられます。そのような 1 節から 4 節までに付け加えられている 5 節 6 節は、もともとは別で独立した農業に関する格言、ことわざだったのではないかと考えられますが、詳しいことは分かっていません。4 節の「ネゲブ」というのは、エルサレムよりもずっと南のヘブロン南側に広がる地域のことですが、原語は「乾燥」という意味です。「水の涸れた谷に、水が流れ、川が流れるように、再び繁栄をもたらしてください」と詩人は歌っています。

日本には春夏秋冬の四季があり、水が豊かにありますから、パレスチナの気候を想像することは難しいですが、パレスチナでは夏の乾季の間は、東からくる熱風によって大地は乾燥して干上がっているそうです。秋になり、そこに恵みの雨が降ってから、人々は種まきを始め、そしてようやく大地は緑の大地になるのだそうです。日本のように水が豊かにある環境ではないために、雨の降らない干ばつは、昔からパレスチナの人々が恐れていたことでした。ヘブライ語聖書の中にも、干ばつで干上がった大地に雨ごいをする物語が記されています(列王記上 18 章)。

日本では春の田植えや種まきというと、涙とは縁遠いように感じますが、たびたびの干ばつに襲われていたパレスチナの人々にとっては、種まきと言えども、心配や気苦労が絶えなかったのかもしれませんが。「本当にこのまま雨は降ってくれるだろうか」「この蒔いた種は無駄に終わってしまわないだろうか」。日々の食事も十分ではなく、また収穫の大半を税、年貢として持っていかれていた人々にとって、「涙と共に種を蒔く」直訳では「涙の内に、種を蒔く」というのは、生活実感として分かりやすい格言だったのかもしれませんが。

神様からの特別のお恵み、祝福を頂いて、顧みられているから、涙が無くなる、苦
労がなくなるわけではありません。またそれらの苦難を「苦しいと感じなくなる」と
いうわけでもありません。あくまでも、苦しいことは苦しく、つらいことはつらい……。
けれども、そこで終わらないということ。その先があり、その先に行くことができる
という確信が与えられているということが、この詩編の言葉ではないでしょうか。

もう一つの聖書の箇所は、新約聖書の「ローマの信徒への手紙」の一節でした。
私たちは神様からの愛を受けているからこそ、苦難があっても絶望しない。苦難は
忍耐を生み、忍耐は品格を、品格は希望を生む。そして希望は失望には終わらな
いとあります。言い換えれば、苦難は絶望には終わらないということでしょう。私た
ちはしばしば大きな苦しみや困難にぶつかると、もうどうしようもないと感
じることがあります。特に大切な人との別れなどは、誰から何を言われても理不
尽でしかなく、全ての希望が失われてしまったかのように感じられるのではないかと
思います。しかし、それでも人々の営みは、続いてきました。どんなに絶望しても、
苦難は絶望には終わらない。その苦難を通過して、いつの日か希望を見出すこと
ができる。なぜなら「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心
に注がれているから」、言い換えれば、神様が共に歩いて下さっているから
でしょう。

イエス・キリストは、十字架の上で、確かに殺され、その死が確認され、そして墓
に葬られました。神の子として不死身で死ななかつたというわけではありませ
んでした。神の子ならば、どんな苦難もなく、絶望もせず、死ななくても良
かったかもしれませぬ。しかし、そんな特別な存在では、私たちの隣には
いてくれないのではないのでしょうか。イエス様は墓に葬られ、三日目に死
から引き起こされました。そのことが私たちに告げていることは、私
たちもまた、今は苦難の中にあり、たとえ絶望していたとしても、決してそ
こで終わりではなく、その先があること、死からの引き起こしがあり、永
遠の命があるということなのではないかと思います。涙の内に種を蒔いても、
喜びの声をあげて刈り入れることのできる時が来る、私たちはそのことを
聖書から告げられています。

苦難と無縁の人なんていません。イエス・キリストもそうでした。自分の苦
しみから目を逸らすために、人の上に人を立てて、その人を敬ったり、あげ
つらったりする先に、本当の救い、出口はありません。命の神はすべての
人々と共におられます。その神様と共にあって、私たちはここから歩み出
していきます。